茨城大学教育学部紀要（教育科学）58 号（2009）465 － 477

大学生の持つ NEET イメージについて

石川　陽介 *・守屋　英子 **

（2008 年 11 月 30 日受理）

About the NEET image of university students

Yosuke ISHIKAWA* and Eiko MORIYA**

（Received November 30, 2008）

はじめに

NEET（Not in Employment, Education or Training）と呼ばれる人たちが昨今増えてきている。NEET とは，就業・就学・職業訓練といった活動をいずれもしていない人の集団のことである。内閣府（2004）の「若年無業者に関する調査」によれば，2002 年現在で NEET の数は，約 85 万人にのぼるといわれている。NEET に関する調査は厚生労働省や総務省でも行われていて，その定義の違いから実数に異なりが見られるが，どの調査においてもその数が近年増えてきていることが示唆されている。

NEET の増加は，そのまま労働人口の減少につながることから，年金問題や GNP の減少を招くといわれており（工藤, 2005），国政レベルで様々な調査･対策が行われるなど高い関心を集めている。

また，2004 年 11 月に茨城県で起きた 2 件の両親殺害事件や，2005 年 2 月に起きた大阪府の教職員殺傷事件など，NEET 状態の若者が引き起こした事件も，マスメディア上で特集を組んで報道され，世間が NEET に注目する一つのきっかけとなっている（本田ほか，2006）。

このように NEET は高い関心を集めているが、本田ほか（2006）は、現在の NEET 言説は「ニート」という言葉にネガティブな意味づけを与えているものが多く，冷静で客観的な現状分析と，真に有効な対策の構想は立ち遅れていると指摘する。

また，佐野（2003）は逸脱に対するラベリングが，そのラベルの対象者に社会的地位の変化をもたらすという二次的逸脱について述べている。秋山（2005）は，この考えを不登校に当てはめ，周囲の人が抱く不登校に対するイメージが不登校生徒への圧力となり，周囲からの軽蔑のこもった視線刺激をさけようと家にひきこもったり，それに対抗するために反社会的行動にでたりするとしている。ネガティブな意味のこもったラベル付けは，そのこと自体が NEET 状態の人に負の影響を与えている可能性が推察される。

＊社会福祉法人 緑会 児童養護施設みどり園
**茨城大学大学院教育学研究科

このように，マスメディアを通じて流布している NEET に対するイメージは，実態を見誤らせるだけではなく，NEET 状態の人をさらに苦しめている可能性も考えられる。これらのことから，NEET に対するイメージを調べることは，NEET の実態と比較することでその理解を深めることにつながるし，周囲からどのように思われているかという観点で NEET 状態の人の置かれている立場を知ることにもつながるであろう。

そこで本論文では，NEET についての概念の整理をまず行い，その後大学生が NEET についてどのようなイメージを抱いているかを検証していくことを目的とする。対象を大学生に絞った理由としては，以下の二点が挙げられる。大学進学率が 50％を越える現在（文部科学省，2005）では，高校生までは就職よりは進学の方に意識が向いていて，職業に対する意識は低いことが言われている。そのため，職業決定と関係のある NEET について考える機会は，高校生までよりは大学生の方が高い可能性が考えられる。また，内閣府（2004）によると，NEET とほぼ同義語として扱われている若年無業者の中の非求職型と非希望型の約 5 割の最終学歴が高校卒であることからも，大学生の多くが大学生活を送っている 18 歳～ 22 歳の間に周りの友人・知人が NEET 状態に陥っている可能性が高いことがうかがえ，NEET について考える機会も高いのではないかと考えられるからである。

NEET 概念の整理

1．NEET とは

NEET は，イギリスにおいて誕生した言葉であるが，イギリスでの NEET はその定義やその語られる文脈が日本の NEET とは異なっている。また，日本においても，NEET の定義は基本的には Not in Employment ,Education or Training に準じているのであるが，統計調査による実態把握においては，その操作的定義が厚生労働省と内閣府において若干の相違があり，ダブルスタンダード状態となっている。

NEET という言葉は，1999 年にイギリスで生まれている。1970 年代イギリスではオイルショックの影響で，不景気にもかかわらず物価が上昇するスタグフレーション状態となり，経済状態が悪化の一途をたどっていた。80 年代に入り，時の首相 M. サッチャーは「小さな政府」を標榜し，政府の市場への経済的介入を抑制する政策をとり，物価の上昇を抑えることに成功した。しかし，その副作用として，イギリス国内の失業者は倍増し，多くの若年失業者が生まれた（牟田，2005）。この若年失業者（16 ～ 24 歳）は，90 年代初めまで増加し，1993 年度では 17.3％まで増加した（藤森，2006）。

その若年失業者対策として，ブレア政権では教育･技能訓練を中心とした「ニューディール政策」を行った。藤森（2006）によると，「ニューディール政策」では，雇用対策の重点を失業手当の支給といった受動的雇用政策から，教育技能訓練などを行って失業者のエンプロイアビリティ（就業能力）を高める積極的雇用政策に移した点に特徴があり，実際に若年失業率の低下に一定の効果をあげたといわれている。

その「ニューディール政策」の効果を調査している時に，この教育技能訓練の場に出てこない群がいることが明らかになった。この政府の「ニューディール政策」に参画してこない群こそが，若年失業者の問題の中心であるとして，警鐘をならしたのが，1999 年にイギリスの内閣府社会的排

除防止局が作成した調査報告書“*BRIDGING THE GAP: NEW OPPORTUNITIES FOR 16-18 YEAR OLDS NOT IN EDUCATION, EMPLOYMENT OR TRAINING*”である。この中で，初めて「就業・就学・職業訓練といった活動をいずれもしていない人」に対して NEET という言葉が使用され，NEET 状態の中でも，特に 16 ～ 18 歳の人々はニューディール政策の対象外（ニューディール政策では，対象毎に失業対策プログラムが用意されていたが，若年失業者のプログラムは 18 ～ 24 歳であった）であったことからも，その対応が急務であるとした。16 歳というのは，イギリスでは義務教育が終了する年のことで，一般的にはその後は就業するか，「6th　Form（基本就学期間は２年間）」という日本でいう高等学校，もしくは職業訓練校に進学する年である。この調査報告書では，16 ～ 18 歳で NEET 状態にあった者は，その後も教育訓練に参加せず，長期的キャリア形成の可能性は低く，税金納入者ではなく様々な社会福祉給付受給者になる可能性も低くない，ということが報告された。

２．イギリスにおける NEET

イギリスにおける NEET の定義は，文字通り「就業・就学・職業訓練といった活動をいずれもしていない人」である。そのため，失業者，障害をもって働けない人，ボランティア活動のみをする人なども，全て NEET となる。

イギリス政府が NEET 対策に力をいれる理由として，藤森（2006）では以下の３点を挙げている。

第一に，NEET は社会的排除と密接につながっていることがある。社会的排除とは，「低所得，スキル不足，失業，家族の崩壊，健康の悪化，劣悪な住宅環境，地域の治安の悪化といった問題が絡み合い，個人や地域がそこから抜け出せない状況」をいう。社会的排除に陥った場合，自力で脱出することは難しく，特に NEET は「低所得（求職者手当などによる収入）」であるがゆえにスキルをつけるだけの資金がなく，スキルがないために「無職」となり，職がないために，「低所得」という悪循環に陥りやすい。イギリスでは，この社会的排除により，ホームレス化，アルコールや薬物依存の問題，適応障害などの問題を抱える若者がみられており，彼らが社会とのつながりを回復するために，外部からの支援を必要としている。

第二に，NEET が引き起こす社会的排除が世代間に連鎖する恐れがあることだ。80 年代のサッチャー改革以降，イギリスでは所得格差が拡大し，親の所得の多寡が，子供の教育に影響を与え，さらに就職にも影響する状況が顕在化してきている。これは，貧しい親から生まれた若者は，裕福な親から生まれた若者に比べて十分な教育を受けられず，安定的な職を得にくい傾向があることを示している。このような状況は，競争社会の前提であるスタートラインが揃っていない点から問題にされている。

第三に，NEET の増加が国の財政負担を高める点である。イギリスの求職者手当（Jobseeker's Allowance）には，「拠出制求職者手当（Contribution-based Jobseeker's Allowance）」と「所得調査制求職者手当（Income-based Jobseeker's Allowance）」の２種類があり，「所得調査制求職者手当」は保険料を拠出していなくても一定の資力調査や求職者要件を満たせば，国庫負担によって無期限に求職者手当を受給できる。このため，NEET の増加は，納税による収入の低下だけではなく，社会保険給付による国家の財政負担をも重くさせる。

このように，イギリスにおける NEET 問題は，国家としての財政問題にとどまらず，社会的排除という困難な立場の人への支援，またはそうならないための予防という文脈で語られている。

“*BRIDGING THE GAP*”によると，NEET になりやすい若者の特徴として，

・親が貧しい，または無職である
・少数派の民族に属している
・以下に示すような社会参加するにあたっての障害となる環境下にいる
（1）家族の介護をしている
（2）10 代の親である
（3）ホームレスである
（4）施設にいる
（5）学習に困難を抱えている
（6）障害を持っている
（7）精神疾患を抱えている
（8）ドラッグ・アルコールを乱用している
（9）犯罪に巻き込まれている

を挙げており，生まれつきの環境，及び現在の取りまく環境が NEET になることに影響を与えているとしている。

また，最初に NEET について論じた“*BRIDGING THE GAP*”が 16 ～ 18 歳について述べていることもあり，NEET を対象にした調査・研究のほとんどは，10 代を対象にしている。

3．日本における NEET の定義

厚生労働省, 内閣府ともに直接 NEET の定義として明文化したものは存在していない。どちらも，若年無業者という用語（内閣府においては，若年無業者の下位分類である「非求職型」と「非希望型」の合算）に NEET を関連付けて論じているだけである。

しかし，書籍や論文などにおいては，この若年無業者として算出された数字が NEET の数として取り扱われているのが実情である。そのため，本論文ではこの厚生労働省と内閣府の若年無業者の定義を日本における NEET の定義として論じることにする。

厚生労働省 (2006) では, NEET に近い概念と前置きをした上で, 若年無業者の数を集計している。厚生労働省による若年無業者とは，年齢 15 ～ 34 歳に限定し，非労働力人口のうち家事も通学もしていない者を意味する。非労働力人口とは，ILO（国際労働機関）基準の定義によると「就業しておらず，かつ就業の意志のないもの」とのことである。

内閣府では「青少年の就労に関する研究会」を 2004 年 7 月より開催し，総務省統計局「就業構造基本調査」を特別集計することで，若年無業者の実態を調査している。

内閣府の調査における若年無業者とは，（1）高校や大学などの学校及び予備校・専修学校などに通学しておらず，（2）配偶者のいない独身者であり，（3）普段収入を伴う仕事をしていない 15 歳以上 34 歳以下の個人を意味する。さらに，この若年無業者を，就業希望を表明し，かつ求職活動を行っている「求職型」, 就業希望は表明していながら, 求職活動は行っていない「非求職型」, 就職希望を表明していない「非希望型」に分類し，NEET は,「非求職型」及び「非希望型」の無業者にあたるとしている（内閣府，2004)。

厚生労働省と内閣府の NEET についての定義の類似点としては,（1）年齢が 15 ～ 34 歳で,（2）

就業・職業訓練には従事しておらず，（３）就業の意志のないもの，という部分である。相違点としては，以下の点が挙げられる。

第１点目としては，「通学」の意味が，内閣府においては学籍があるかどうかということであるのに対し，厚生労働省では実際に学校に通っているかどうかに焦点を当てている部分である。そのため，高校生の不登校や大学生の休学や長期的な講義の欠席は，内閣府の定義においては NEET に含まれないが，厚生労働省の定義においては NEET に含まれることとなる。このことに対し，小杉（2005）は，不登校の学生･生徒は，社会的組織への参加という点からは課題をかかえており，政策対象としては意識しておくべき層だ，と述べている。

第２点目としては，「家事」の扱いである。厚生労働省では家事従事者を NEET に当てはめないのに対し，内閣府では未婚者・離婚者の「家事手伝い」を NEET として当てはめている。内閣府の定義に準拠して行った調査である内閣府政策統括官（2005）では，未婚者・離婚者の「家事手伝い」を NEET として当てはめる理由として，‘‘ニート及びその支援組織に対するインタビュー調査を行うと，仕事をしていない現状を「家事」若しくは「家の手伝い」をしていると表現する若年無業者は，女性について少なくない。特定の家庭外の社会参加活動をしていない場合，自らの現状を的確に表現する言葉が見付からず，仕方なく「家事をしている」という項目を選択せざるを得ない。これらの無業者は，就業の困難さやその原因となっている問題点について，家事と答えないニートの無業者と異なるところは少ないように思われる。’’ と述べている。

第３点目としては，「配偶者の有無」である。厚生労働省の定義では，結婚をしていても家事も通学も就業もしておらず働く意志がない人は NEET に当てはまるのに対し，内閣府の定義では既婚者は NEET から除外される。内閣府政策統括官（2005）では，既婚者を NEET から除く理由として，その存在を軽視するわけではないとした上で，‘‘配偶者という個人にとってかけがえのないパートナーの存在は，何者にも代えがたい個人にとっての本当の意味でのセーフティーネットである。そんなセーフティーネットも持たない無業の個人が置かれている状況をここでは注目していきたい’’ と述べている。

４．日本において NEET が語られる文脈

イギリスの NEET と日本の NEET は，（１）基本的には NEET が就業・就学・職業訓練といった活動をいずれもしていない人であるということ，（２）財政問題につながるとして，国家レベルでの対策がとられている，という点では類似している。日本においてもイギリス同様，NEET は前述のように年金や GNP の関係から財政問題として語られている。

しかし，イギリスでは NEET の中でもその政策対象の中心を 16 ～ 18 歳にしていて，失業者も含まれるのに対し，日本では 15 歳以上 34 歳以下として NEET に失業者は含まれない点が異なっている。これは，イギリスが NEET について文字通り「就業・就学・職業訓練といった活動をいずれもしていない人」であるかどうかだけで判断しているのに対し，日本では「就業の意志」があるかないかということも判断基準に入れているためである。厚生労働省（2005）では，政府指針の一つである「若者自立・挑戦プラン」についての説明がされており，そこでは ‘‘若者の働く意欲や能力を高めるための総合的な対策等に取り組む’’ としていて，NEET は個人の意欲や能力の問題として捉えている点が伺える。

イギリスの NEET が社会的排除という困難な環境下に置かれているのが問題であるという文脈から語られているのに対し，日本の NEET はしばしば荒木（2005），浅井・森本（2005）などのように「親の甘やかし」「志のない」といった NEET 個人またはその親の問題として語られることがある。この傾向は，マスメディアの NEET 報道で強く，厚生労働省や内閣府による NEET の定義にとどまらず，そこにある種のイメージを付与するような形で行われている。本田ほか（2006）は，“「ニート」という存在にはさまざまな特徴付け―その大半が，「自立していない若者」「自分勝手な若者」といったイメージなのだが―が与えられるようになり，本来の定義である「15 ～ 34 歳で，就業もしていなければ，教育も受けておらず，また求職活動もしていない若年層」という意味から離れていった。”と述べている。これらのことは，特に週刊誌・インターネット上で強く行われており，NEET へのネガティブイメージを氾濫させる結果につながっている。

大学生の持つ NEET イメージについての質問紙調査

1．目的

大学生が，NEET についてどのようなイメージを抱いているのかを明らかにする。また，その NEET という状態に対して自分をどのように位置づけているのかを明らかにする。

2．方法

2．1　調査対象

地方国立 A 大学の集団講義形式の授業中に，大学生 72 名（男性 37 名，女性 35 名）を対象に，自由記述式の質問紙を集団配布・一斉回収方式で行った。このうち，調査項目に回答漏れがある回答者 2 名を除いた，70 名が有効回答者となった（男性 35 名，女性 35 名）。調査対象者の平均年齢は 18.97 歳（18 ～ 21 歳，標準偏差 0.70）であった。

2．2　調査時期

2005 年 12 月中旬。

2．3　調査内容

この質問紙は，Table1 に示すとおり，フェイスシートと Q.1 ～ Q.4 で構成されている。

Table1　NEET イメージについての質問紙調査の質問紙構成

1.	フェイスシート
2.	NEET という言葉を聞いたことがあるかどうか（2 件法）　[Q.1]
3.	NEET のイメージ（自由記述）　[Q.2]
4.	NEET に対するあこがれ（4 件法）　[Q.3]
5.	Q.3 の理由（自由記述）　[Q.4]

１．フェイスシート

大学，所属学部・学科，性別，学年，年齢の記入を求めた。

２．NEET という言葉を聞いたことがあるかどうか　[Q.1]

大学生にとって，NEET という言葉がなじみがあるかどうかを知るために，NEET という言葉を聞いたことがあるかどうか，「はい」「いいえ」の２件法で回答を求めた。

３．NEET のイメージ　［Q.2］

大学生が NEET に対して，実際にどのようなイメージを抱いているかを知るために，「ニート（NEET）とは，15 才以上 34 才以下の人で，学校に行かず，仕事にも就かず，職業訓練も受けずにいて，働く意志のない人のことです。」という教示を示した後に，その教示と今までの知識から NEET に対してどのようなイメージを抱いているかを自由記述で尋ねた。

４．NEET に対するあこがれ　［Q.3］

大学生が NEET という状態に，自分がなることについてどのように考えているかを知るために，NEET に対して自分もなってみたいという憧れがあるかどうかを「１，なってみたい」「２，少しなってみたい」「３，あまりなりたくない」「４，なりたくない」の４件法で尋ねた。

５．Q.3 の理由　［Q.4］

大学生の NEET に対する憧れや NEET になりたくないという思いが，どこからきているのかを知るために Q.3 の回答の理由を自由記述で求めた。

３．結果

３．１　NEET という言葉の知名度

Q.1 の NEET という言葉を聞いたことがあるかどうかという質問に対し，「はい」と答えたのは 69 名，「いいえ」と答えたのは１名であった。この回答の差に，統計的に有意な差が見られるかを確認するために，x^2検定を行った。その結果，0.1％水準で回答には偏りが見られた（x^2（１）=66.06，p< .001）。このことから，大学生にとって NEET という言葉が聞きなれた言葉であるということが明らかとなった。

３．２　大学生の持つ NEET イメージ

Q.2 の NEET に対するイメージの自由記述回答を切片化し，KJ 法による分類を行った。KJ 法は，心理学専攻の大学院生のべ 10 名で行った。総切片数は 180 で，そのうち NEET イメージ以外のもの（「回答者側の感情としてのあきれ」「NEET に対する忠告」「社会への提案」etc）を除いた 148 切片を有効な切片として扱った。

大学生の持つ NEET イメージＡ型図解化を Figure １に示す。

KJ 法の結果，大学生の持つ NEET イメージとして，【自立なき親子関係】【精神的に不健康】【目標を持たずに生活している】【現実に向き合えない】【誰にでもありえること】【働くことよりも大切なものがある】の６つの大カテゴリーと「離れざる」が得られた。なお，ここでいう「離れざる」とは，６つの大カテゴリーに組み込まれなかった切片の総称である。３つの小カテゴリーと９つの切片から成るがこの切片間に特別な関係はない。川喜田（1970）では，どこにも属さない「離れざ

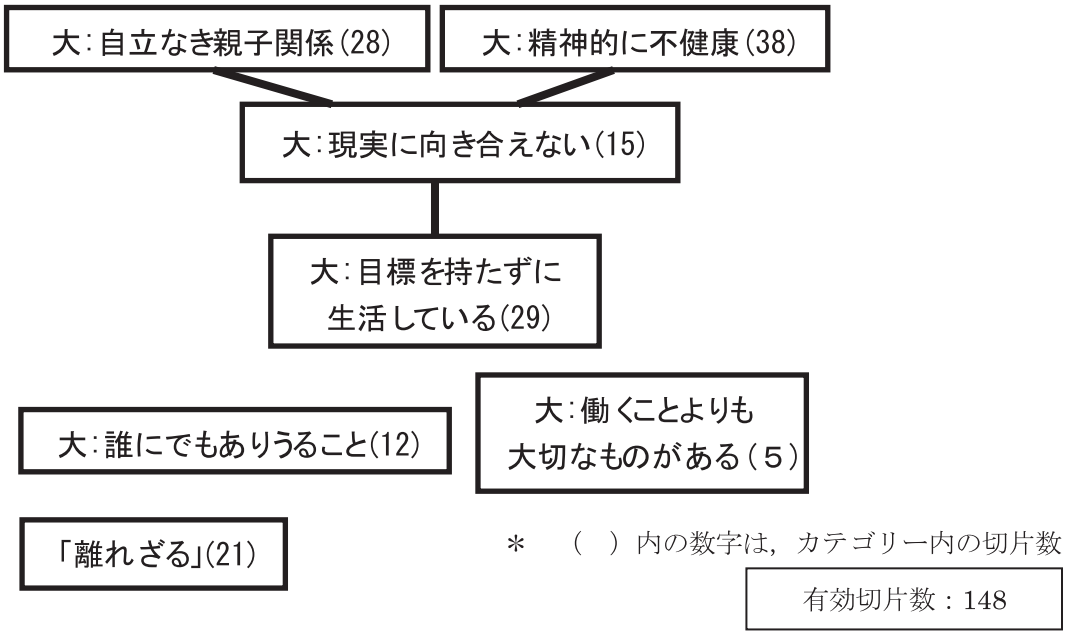


Figure1　大学生の持つ NEET イメージＡ型図解化

る」も大カテゴリーにまとまった概念と同等に扱うようにと述べられている。

以下に，大学生の持つ NEET イメージのＢ型文章化を示す。

【 】･･･大カテゴリー　『 』･･･中カテゴリー　＜ ＞･･･小カテゴリー　「 」…切片

１．【自立なき親子関係】

NEET は『親に依存している』。＜親に甘えている＞し，＜親のスネをかじっている＞存在だ。「甘えがあるからニートでいるのだろう」。＜自立していない＞。そういう意味では，＜幼稚＞ともいえる。＜過保護な環境で育ってきた＞のだろうから，子どもの NEET 状態を許す『親が甘い』。しかし，その一方で NEET は＜親に迷惑をかけている存在＞なので，『親が苦労している』ともいえる。

２．【精神的に不健康】

NEET は『対人コミュニケーションの苦手さ』を持っている。だから『孤独感』が強く，『コモル』傾向が強い。そのため，家に＜ひきこもり＞，＜ネクラ＞である。『憂うつ』で，＜自分に自信がなく＞，＜マイナス思考＞になり，『悲観的』になってしまい，「周りの目が気になってしまう」。＜情緒不安定＞さもみられる。

３．【目標を持たずに生活している】

NEET は，『目標がない』。＜目的がない＞し，＜やりたいことが見つからない＞ので，＜生きがいや夢・希望を持っていない＞といえる。そこから，「目的がないためになまけている人」という見方もできる。また，「自分の夢や目標が持てず，途方に暮れているイメージがある」。彼らは，

いつも＜だらだらしている＞し，＜遊んでいる＞。「自分がやりたいこともわからずにぶらぶら１日を過ごしている」。

４．【現実に向き合えない】

NEET は，『根拠もなく自信満々である』。＜働いたら負けかなと思っている＞し，「自分の力を過大評価している」。その一方で，＜現実逃避＞をして，＜働かない理由を周りのせいにする＞。「周りを見れない人・現実を見れない人」である。

５．【誰にでもありえること】

NEET は，『NEET になるだけの理由があった』。＜過去につらい体験をしている＞のかもしれないし，＜何か深刻な理由がある＞のかもしれない。NEET になることは，『仕方ない』ことで，＜仕方なく NEET になってしまい（個人的・社会的要因）かわいそう＞である。

６．【働くことよりも大切なものがある】

NEET は，『夢を追いかけている』人たちだ。「何か夢に迷っているとか事情がある人もいるだろう」。また，『NEET も NEET なりに考えている』。『現状をどうにかしたい』と思っている。

７．離れざる

NEET は，＜社会的にはあまり良い印象ではない＞し，個人的にも＜良くないイメージ＞を持っている。＜おたく＞で「ダメな人間」だ。「高校や大学に在学する不登校と少しかぶる」一方で，「非行にはしる人」というイメージもある。「現代社会特有」で「日本特有」でもあり，「社会問題」となっている。「大変」だ。「社会の一員という自覚がない」と思う。ただ，「決して悪い人（不真面目な人）ばかりではない」。

３．３　大学生の NEET に対する憧れの有無

Q.3 の NEET に対して自分もなってみたいという憧れがあるかどうかという質問に対して，それぞれの選択肢に対する回答数は，「１，なってみたい」１名，「２，少しなってみたい」４名，「３，あまりなりたくない」５名，「４，なりたくない」60 名であった。この回答の差に，統計的に有意な差が見られるかを確認するために，x^2検定を行った。その結果，0.1％水準で回答には偏りが見られた（$x^2(3)=138.11$，$p<.001$）。このことから，NEET になりたいと思う大学生が少ないということが明らかとなった。

３．４　大学生が NEET になりたいと思う理由，大学生が NEET になりたくないと思う理由

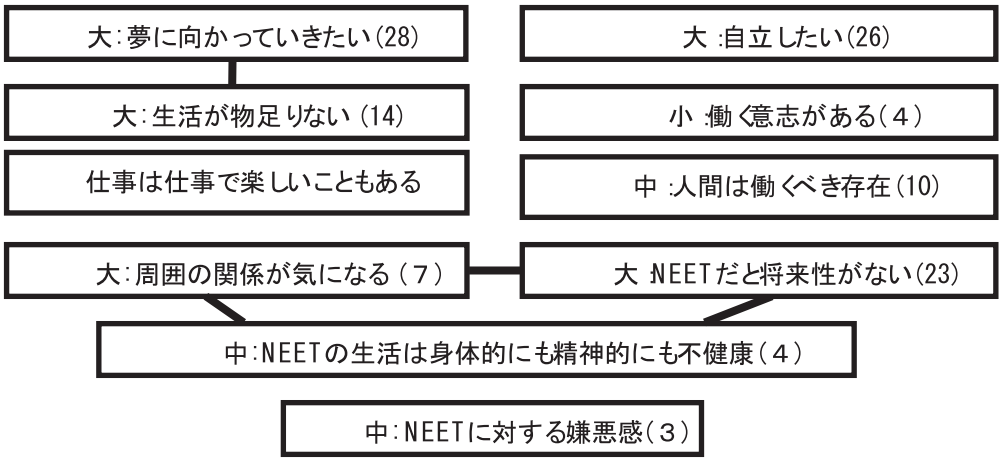
Q.3 の質問に対し，「１，なってみたい」，「２，少しなってみたい」と回答した群の Q.4 に対する回答を大学生が NEET になりたいと思う理由とし，同じく Q.3 の質問に対し，「３，あまりなりたくない」，「４，なりたくない」と回答した群の Q.4 に対する回答を大学生が NEET になりたくないと思う理由とした。

大学生が NEET になりたいと思う理由の自由記述回答を Table2 に示す。

大学生が NEET になりたくないと思う理由の自由記述回答については，切片化し，KJ 法による分類を行った。KJ 法は，心理学専攻の大学院生のべ９名で行った。総切片数は 124 で，そのうち NEET になりたくない理由以外の回答をした切片を除いた 120 切片を有効な切片として扱った。大学生が NEET になりたくないと思う理由のＡ型図解化を Figure2 に示す。

Table2　大学生の NEET になりたいと思う理由

Q.4　自由記述回答　（N= 5）
・辛い思いをしないのもまたアリかと…。
・家でパソコンと遊んでいるのも好きだから
・やりたいことがあればね。
・学校に来るのがめんどうだから
・うらやましいから。お金とか親からいくらでももらえるし。



＊　（　）内の数字は，カテゴリー内の切片数

有効切片数：120

Figure2　大学生の NEET になりたくない理由Ａ型図解化

KJ 法の結果，大学生の NEET になりたくない理由として，【夢に向かっていきたい】【生活が物足りない】【自立したい】【NEET だと将来性がない】【周囲の関係が気になる】の５つの大カテゴリーと，『人間は働くべき存在』『NEET の生活は身体的にも精神的にも不健康』『NEET に対する嫌悪感』の３つの中カテゴリー，＜働く意志がある＞という小カテゴリー，「仕事は仕事で楽しいこともある」という切片が得られた。

以下に，大学生の NEET になりたくない理由のＢ型文章化を示す。

【 】･･･大カテゴリー　『 』･･･中カテゴリー　＜ ＞･･･小カテゴリー　「 」…切片

１．【夢に向かっていきたい】

「自分のやりたいことにどんどんチャレンジすれば何かしら道はひらけると思うから」，『自分のやりたい仕事を見つけて，その仕事につきたい』し，『常に目標を持って，努力をして充実感を味わいながら生きていきたい』と思う。

また，『明確な夢・目標・なりたい職業がある』し，「それができるよう，今努力しているから」，NEET にはなりたくない。

２．【自立したい】

『家族に迷惑や心配をかけるのが申しわけなく，そんな自分が許せない』と思うので，＜経済的に自立したい＞し，＜自分で生きていきたい＞と思う。要は，＜自立したい＞。なぜなら，『いつまでも親に頼るのは恥ずかしいし，むしろお金を返していかなきゃいけない』と思うからである。だから，NEET にはなりたくない。

３．【生活が物足りない】

NEET は，『生活がつまらなく，生きている実感がわかない』と思う。そうすると，自分は『暇に耐えられず，途中で何かをしたくなる』ので，NEET にはなりたくない。

４．【周囲の関係が気になる】

私は，『周りからの悪い評価を気にする』し，『孤独になりたくない』と思うので，NEET にはなりたくない。

５．【NEET だと将来性がない】

NEET になると，『将来が不安』だし，『NEET だと自己成長しない』と思う。結局，＜ NEET だといい人生にならないから＞，NEET にはなりたくない。「ニートになってもいいことなんて何にもないんでしょ」。

６．『人間は働くべき存在』

＜人間は働かなければいけないと思う＞。だから，NEET の人が＜なぜ，働かないで生きていけるのかが不思議＞だし，＜フリータとしてでも働くべき＞だと思う。「働く意志がない＝だらしがない感じがする」し，「なんの目的もなし」に，「したくないから」という理由でニートになることは，明らかに間違っている」。

７．『NEET の生活は身体的にも精神的にも不健康』

「NEET の生活は逆に不健康そう」。「疲れそう」だし「精神的に辛そう」。なんか，「人生あきらめてるっぽい」。

８．『NEET に対する嫌悪感』

＜自分の中でのニートのイメージがよくない＞。さらには，「NEET は，生理的にも嫌悪感がある」。

９．＜働く意志がある＞

「働く意志はある」。「自分は働く意志がある，働きたいと思うから」，「きちんと仕事を持ちたい」。「自分は，早く就職して働きたいと思っている」。

10.「仕事は仕事で楽しいこともある」

考察

NEET は，工藤（2005）でも言われているように，非常に幅の広い概念であり，彼らへの支援が必要と一口に言っても，個々の NEEDS にはかなりの差があることが想定される。日本の現状で

は，NEET と一括りにされ，また本田ほか（2006）が指摘するような，ネガティブなイメージ付けが行われていることで，その個々の NEEDS が見落とされている感じがある。内閣府（2004）で指摘されているように，日本の NEET にもイギリスの NEET のように社会的排除との関係がある群がいることや，本田ほか（2006）や第一生命経済研究所（2005）の指摘するように，ニートの原因として雇用環境要因が関係していることから，NEET 問題には社会・経済的な要因があることが推察される。NEET への支援を考える場合には NEET を現状（不登校・ひきこもり・非行傾向 etc）や NEET になった過程（学校中退後・学校卒業後・離職後 etc）などにより細分化し，それぞれに必要な支援を行うことが必要と考えられる。NEET への支援に関しては社会・経済的な視点も，心理的な視点も含んだ多角的な視点を持つ必要があると考える。

本研究で明らかになった大学生の持つ NEET イメージは，全体的にネガティブなものが多く，特に NEET 個人の要因に照らし合わせて語られているものが多い。内閣府（2004）や第一生命経済研究所（2005）でも指摘されているように，NEET は必ずしも個人の要因だけではなく，家庭の経済的な貧しさや雇用環境要因も関連しているのだが，それらについて語られた切片はほとんどない（【誰にでもありえること】の小カテゴリー＜仕方なく NEET になってしまい（個人的・社会的要因）かわいそう＞や，離れざるの「社会問題」にみられる程度）。本田ほか（2006）の指摘するような，NEET に対する社会的要因の存在が軽視され，NEET は NEET 本人の意識や意欲，あるいは NEET を抱える家庭に問題があるという考えが大学生の中にも浸透しているのではないだろうか。しかも，分析対象外となった NEET イメージ以外の切片は，そのほとんどが NEET へ向けた回答者側のあきれや忠告などで，回答者のもつ NEET への否定的な感情を感じさせるものであった。このことは，NEET の社会的な地位の低さを表しており，佐野（2003）のいう二次的逸脱が NEET においても生じている可能性が考えられる。

このようなネガティブな NEET イメージが NEET へ与える心理的影響は大きいと考えられる。Bynner and Parsons（2002）は実証的研究から，NEET 経験が就業だけではなく，その後の精神的健康にも影響を与えると述べている。NEET への支援を考える上では，このような二次的逸脱への心理的介入も必要と考えられる。牟田（2005）や曽我（2005）が述べるように，日本の NEET は不登校や高校・大学の中退，ひきこもりとの関連性が強くいわれており，牟田（2005）では不登校やひきこもりになってからの早期対応が NEET への移行を防げるかどうかの鍵になるとしている。不登校やひきこもりに対しては，心理的な介入の有用性が多くの研究において論じられてきている（伊藤，2003：松本，2003：長瀬，2005：高橋，2005etc）。また NEET の一形態とも考えられるひきこもりには，診断は受けていなくても不安障害・強迫性障害・摂食障害・うつ病・統合失調症 etc の可能性もあるといわれている（内田，2001）。NEET 状態にある人の現在及び将来の精神的健康を考えると，全ての人に必要かどうかという議論はあるにしろ，心理的支援は考えなくてはいけないものといえる。

引用・参考文献

秋山博介　(2005)．不登校についての一考察：ラベリングに焦点をあてて　実践女子大学生活科学部紀要，42，39-48.

荒木創造　(2005)．ニートの心理学　小学館文庫

浅井宏純・森本和子　(2005)．自分の子供をニートにさせない方法　宝島社

第一生命経済研究所　(2005)．最も有効なニート対策は若年雇用のミスマッチ解消

藤森克彦　(2006)．英国の若年雇用政策から学ぶこと　みずほ情報総研

本田由紀・内藤朝雄・後藤和智　(2006)．「ニート」って言うな！　光文社

伊藤桂子　(2003)．ある不登校児の原因に関する考察　臨床教育心理学研究，29，88.

John Bynner and Samantha Parsons（2002）．Social Exclusion and the Transition from School to Work *Journal of Vocational Behavior*, 60, 289–309.

川喜田二郎　(1970)．続発想法　中公新社

小杉礼子　(2005)．フリーターとニート　勁草書房

厚生労働省　(2005)．平成 17 年度版厚生労働白書

厚生労働省　(2006)．平成 18 年度版厚生労働白書

工藤啓　(2005)．「ニート」支援マニュアル　PHP 研究所

松本剛　(2003)．大学生のひきこもりに関連する心理的特性に関する研究　カウンセリング研究 , 36（1），38-46.

文部科学省　(2005)．平成 17 年度学校基本調査速報

牟田武生　(2005)．ニート・ひきこもりへの対応　教育出版

長瀬信子　(2005)．ひきこもり状態にある本人とその家族との家族療法　家族療法研究，22（3），243-253.

内閣府　(2004)．若年無業者に関する調査（中間報告）

内閣府政策統括官　(2005)．H17 青少年の就労に関する研究調査

佐野正彦　(2003)．逸脱論と＜常識＞－レイベリング論を機軸として－　いなほ書房

Social Exclusion Unit　(1999)．*BRIDGING THE GAP: NEW OPPORTUNITIES FOR 16-18 YEAR OLDS NOT IN EDUCATION, EMPLOYMENT OR TRAINING*

曽我昌祺　(2005)．バッテリーモデルに基づく不登校児への治療的アプローチ　関西福祉科学大学紀要，9, 19-35.

高橋哲郎　(2005)．児童・生徒の不適応行動としての不登校の実態・原因に対する心理臨床的援助　精華女子短大紀要，31，17-26.

内田千代子　(2001)．ひきこもりカルテ　法研